働こう障害者も働けるんだオレたちも
# こぶしだより
1994年3月7日(月)
第165号
―発行―
こぶし作業所
宇都宮市柳田町1401
☎0286(62)1911

盛況、第一三回こぶしまつり開催

新しい企画も大好評　エッー職員もバンドデビュー？

去る二月二〇日（日）第一三回こぶしまつり（地域交流事業、社会福祉施設イメージアップ推進事業）がこぶし作業所にて行われ、仲間、家族、地域の方々そして老人会のみなさん、ボランティア等二〇〇名近くの人たちが集い賑やかな楽しいひとときを過ごすことができました。

"こぶしの行事はいつも雨"のジンクスを破って、春を思わせるポカポカ陽気の中、昼食時には庭に出て配られた炊き込みご飯やトン汁等に舌づつみを打つ人たちの姿も見られるほどでした。

こぶしまつりも一二年も続けてくると少々マンネリ化もしてこようもの。そこで今回初めての試みとして、家族や仲間、職員それぞれの思いを作品に託しての"みんなの作品展"を企画しました。絵、書道、押し絵、人形、手芸品、さをり織り等々、たくさんの力作が揃い参加者の目を引きつけました。

もう一つのメイン企画は舞台、ヴィオラ、ヴァイオリン、ピアノの三重奏団（トリオクメタナ）による演奏は会場のみんなを魅了しました。

そして、仲間たちの構成詩は"生きること"と題して、こぶし、けやき両作業所の仲間全員が舞台に立ち（といっても狭くてみんなの顔が見られず残念でした）、作業所の歴史と日頃の仲間たちのエピソードや仲間ひとりひとりの紹介を歌とともに披露、大きな拍手を受けました。この舞台に参加者からは「仲間みんなが生き生きとした姿に感激しました」そんな感想が寄せられました。

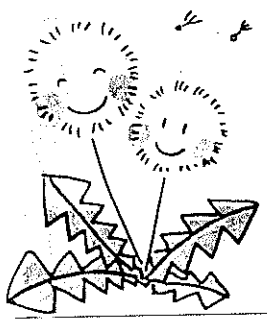
模擬店ではいつものメニューに加え、けやき作業所のお母さん方による手づくりのおまんじゅうやサラダ、煮物なども売られ、参加者は"おふくろの味"を満喫、お腹もあったかになりました。

そして、カラオケ大会、恒例の福引きと続き、最後はこれも初挑戦、職員の生バンド（名前もありません）演奏で幕を閉じました。

テント、椅子など快く貸しくださった平石北小、産直野菜を提供してくださった上三川農民連、舞台を見る間もなく模擬店やバザーの売り子として活躍してくださったボランティアのみなさん、そしてお忙しい中、足をお運びいただいた参加者のみなさんありがとうございました、心からお礼を申し上げます。

なお、こぶしまつり当日"宇都宮ケーブルテレビ"の取材があり、後日放映されたそうです。そしておまんじゅう作りの場面を見た和菓子屋さんより「自分の店で作っているものによく似ている、参考のためにぜひ試食したい」との問い合わせもありました。ご覧になりたい方はビデオテープがありますのでこぶしまでお問い合せください。

〈鈴木〉



トピックス

《けやき編》

二月四日に、とてもかわいい小犬がけやきにお目見えとなりました。斉藤健さん宅の隣の家で生まれたそうで、やや茶のかかったオス犬です。早速仲間が名前を考え、たまたま職員が呼んでいた「ワンちゃん」がうけ、而今荘の犬が「イヌ」とのことから、じゃあそれに決めようと「ワンちゃん」に決まりました。一度春に飼った"ジョン"に逃げられた経験もあり慎重に、そして休日は誰もいなくなるので慣れるまでは、直井、見目宅で一回ずつ土、日の面倒を見てもらい、皆に愛されています。

一人遊びが大得意です。よろしくネ！

〈金田〉

《こぶし編》

こぶしにいる番犬「チー」は、生まれたのがついこの前と思っていたのに知らないうちに成長して、今では立派な"犬"になりました。

しかし、遊び盛りの「チー」は何度も首輪を外して脱走したり、欲求不満が昂じて犬小屋が倒壊寸前になるくらいかじってしまいます。食事の皿がいつも空なのですごい食欲だと感心していたら「チー」の食事時間になるとどこからともなく集まった野良犬が「チー」の残飯を食べていたからでした。

誰かこのかわいそうな「チー」に花嫁を紹介してください。

〈田島〉

輸入米を考える

田植えの時期になると、どこから湧いてくるのかサラサラと田んぼに水が入り日本列島をおおいつくす。

そして、いつのまにか農家は湖上の館となって五月の風に波紋をつくり、揺らぐ。空気のよどみのない日に立てば水は天を写し、心を英雄に仕立ててくれる。原野を開拓した祖先たちの勇気が移るのだろうか。

日本の風情を形づくってきたその米が農家とともに消えようとしている。これは誇張ではなく、今回のこぶし米騒動の中で米問題を学び、受けた実感である。紙面に限りがあるのでもみ殻のような報告になってしまうのでご容赦願いたい。

四二年に戦時統制として生まれた食糧管理法（販売される米は全て国が管理する）は戦後も引きつがれ、五二年に改正。「二重価格制」：つまり安定して米が作れるように生産者米価を：、家計の安定のため消費者米価を：が確立、そのために生じる経費は国が一切負担するというもの。

しかし六九年の「改正」で自主流通米（取引価格決定に国が関与しない）が導入。その下で特定銘柄への偏りがでて、今では主流（七四％）となる。

さらに七〇年から生産調整が始まり、減反は全水田の三〇％にもたっしている。また七二年には米の小売価格が自由化、一方で標準米制度ができ、安い（＝まずい）米を国が確保することになった。

こうした中で七〇年代後半から、3K赤字（国鉄、健保、米）が臨調の攻撃対象となり、生産者米価を厳しく抑制（一七年前と同価格）、農業離れ、ヤミ丁メの公然流通につながっていった。こうした状況を加速してきたのが、輸入農産物の受入れを前提に競合する国内生産の抑制、大農優遇、機械化を促進するという、六一年以来の農業基本法路線である。こうした流れが現在の米の市場開放につながっていく訳で、一言で言えば貿易摩擦のツケを農民と国民におしつけたものであるといえる。

今回の凶作、米不足もこうした政策下の災害とも言われている。つまり、ヤミ米の横行＝高級銘柄米の主流化＝天災に弱い。一方での耐冷、病性品種の開発をおこたり、機械化のため冷害に強い深水管理ができないこと（田んぼが浅いと根のはりが浅く、冷害に弱い）等々である。また備蓄量も年々減らし、昨年の一〇月には二六万トンという異常事態に進展、減反緩和も追いつかず今回の事態となった。

まさに意図的農業つぶしだと考えざるを得ない、事実一般の労働者が八時間で平均一万五千円を得ているのに、農業従事者は五千七百円という低賃金ぶりである。同じ日本にくらす農家の人々にこれくらいの、こうした常識的情報を持ちつつ接してきたのかと問われるとはずかしい気がする。やれ税金が少ないだの、とそれこそ農家の実態を誹謗する言葉こそ向けても：である。

いまや日本の食糧自給率は三〇％を割っている、こうした国は世界でもまれだろう。滅亡寸前のローマ帝国という人もいる。金を出せば怖いものはないというのが今の政策だと思わざるを得ない。しかし、米はほとんどが自給されている。貿易量は微々たるもの。世界の絶望的飢餓が、世界の食糧を金で買い叩く先進国の暴挙の結果でもあるということもこの際知っておいてもいいのだと思う。

〈高橋〉

米問題"けやき"にも波及

先日けやきに届いたお米を見てびっくり、その袋には"タイ米"と赤く大きく書かれたステッカーが貼ってあった。袋の中もよく見ると、お米の一粒一粒がひょろ長くとても異様だ。ついにけやきの給食にも外米が入ってきたのか、それもバサバサ、ボロボロでまずく臭い！と、外米の中でも一番悪評の高いタイ米が・・・

学校給食では一切外米は使用しないとのこと、福祉施設はどうにかならないものか、おいしい安全な米が食べたい！

〈成田〉

若さあふれるパワー

去る二月四日（金）宝木中学校二年生が立志式を迎え、市内三〇数カ所で"職場体験"を行い、そのうち六名（男子四名、女子二名）が体験実習としてこぶしを利用しました。

こぶしに訪れた生徒さんたちは、一人を除いて、みんな希望した実習先にはずれてしまったとのことで、はじめはずいぶん緊張していたようですが、仲間たちと一緒に作業していくうちに、だんだんリラックスしてきたようでした。午前中は、オリエンテーションのあと男子がベアリング班、女子がリサイクル班にそれぞれ入り、午後は交替しました。

さすがに若さあふれる中学生、その仕事の早さとパワーには思わず一同、圧倒させられてしまいました。

特に缶つぶしは"見事！"の一言で、ガンガンつぶしていく姿にみんなで見とれてしまいました。作業終了後には交流会を兼ねて誕生会を行いました。

働くこと、障害者と接すること等、初めての体験でだいぶと惑っていたようでしたが、みんな一生懸命に頑張っていた姿がとても印象的でした。宝木中のみなさんお疲れさまでした。

中学生から感想が寄せられていますので、一部抜粋してご紹介します。

《ここにいる『仲間』は本当に楽しそうだった。こういう姿を見ているとこぶし作業所などの施設の大切さを知りました。》

《最初は不安で不安ですごく嫌な気持ちでいっぱいだったがだんだんなれてくると、来てよかったなーという気持ちが出てきました。こんなに、仕事をすることが大変ということを知りました。（中略）みんなと、話をしたり、交流ができてよかったです。（中略）でも最初のころは、障害者を見て、笑いそうになったことがあってすごく悪い気持ちでいっぱいでした。一生で一度しかできないかもしれない、この思い出を絶対わすれないようにしたいです。

良い体験ができてよかったです。》

〈斉藤〉

3がつのこよみ

五（土）	休所日
一二（土）	職員会議
一九（土）	休所日
二六（土）	休所日
二七（日）	買物訓練（三七代休）
二八（月）～三一（木）	春休み
	職員は年度末総括会議

十年間のこぶしの思い出

十年間の、ぼくのこぶしの思い出は、りょこうに行ったこと、東京でのこうらく園でジェットコースターにのったのは、うれしかったし、よくおぼえています。また、やくいんになったことと、やくいんの自治会長になったこと、はじめてやくいんになったときはよくわからなかったけど、今では、なんとできるようになりました。つぎの思い出は、やっぱり福岡へしんだいしゃで行ったことかなあ、東京えきについてれっしゃの中で食べたうなぎべんとうがおなかがすいていたのでとてもおいしかったです。福岡のまちは、大きいまちでした。サッカーもかいまくしました。あれから一年たちました。つぎの思い出は、スポーツ大会に出たこと九二年だと思います。ころがしバレーで、あんなに弱いといわれた市内コースが二位まで行ったこと、ぼくはしっぱいしたりするのはいやだなあと思っていたので、あのときは、いっしょうけんめいころがしバレーのれんしゅうを一人でれんしゅうしていましたみんなどのちーむも、ぼくをねらってくるので、びんかんにわかっていました。あとは二年れんぞくだと思います。よくおぼえていないがMVPをとれたことはくは、そんなにかつやくしなかったのにえらばれていいのかなと思いました。また、もう一つの思い出は家のお母さんがびょうきでにゅういんして、ひとりでそうげのところまで車いすでに行けるようになったことです。もおひとつは、いやだといいながらえいせいやだいぶのぶちょうをやったことです。十年間という長い間おせわになりました。これがぼくの十年間の思い出です。あまりいろいろ思い出があるのでなにかからかいていいのかわかりません。

小林正典